

「恋愛」観の多様性について

——桃山学院大生へのアンケート調査から——

木 下 栄 二

I 課題の設定

「恋愛」という言葉が巷に溢れている。雑誌の車内吊り広告にも「あなたの恋愛運を徹底チェック！」(『MANICA』1992・8月号)、「全ての女性必読! 現代の男たちは、恋愛についてこう考えている」(『anan』1993・1・15日号)などと「恋愛」の二文字が並ぶ。「恋愛病の時代」(上野千鶴子, 1990)という表現も違和感を感じさせない時代である。

確かに、現代は「恋愛病の時代」かも知れない。新聞をながめても、「27歳、恋愛結婚したい「見合い」に失望、つる焦り」(読売新聞, 1991・7・29朝刊(人生案内))などという相談を目にする。「恋愛」が当たり前のことと言われる時代では、「恋愛」していないことは苦痛でさえある。そして、この苦痛を逃れるためには「話し下手な若い男性付き合い方も雑誌研究から(なんでもマニュアル—1—恋愛)」(読売新聞, 1991・1・22朝刊)と、「恋愛」マニュアルの修得が人生の重要な課題となり、様々な「恋愛」マニュアルが生み出されることになる。「恋愛論の本、雑誌のSEXマニュアルの大誤解 ほんとうの恋愛は実に楽しくかんたん」(『DENiM』1992・9月号)などと「恋愛」マニュアルを俎上に載せて、さらなる「恋愛」マニュアルが提示されるほどである。「恋愛は論じるものではなく、するものだ」(吉本隆明, 1985)と語った思想家がいるが、現代の「恋愛」は発達したマスメディ

価値観の相違



秋月りす
『OL進化論(8)』
講談社刊より

アに載って、「する」以前に——恋愛なんてしようがしまいが——姦しく論じられている。

誰もが「恋愛病」にかかっているという現代、しかし、われわれは「恋愛病」について、何をどれだけ知っているのだろうか。左の漫画に登場する二人の若い女性を見ても、同じ「恋愛」を話題にしながらも考える内容は異なっている。誰もが「恋愛病」にかかっているとしても、その症状は多様である。

「恋愛病」の症状にはどのようなバリエーションがあり、バリエーションの原因や結果について何を知っていると言えるだろうか。

誰もが「恋愛病」にかかっているという現代、まさにそれは「恋愛」が社会学的な病気となった時代と言える。しかし、社会学は「恋愛」という現代社会における重要かつ一般的とさえ言える社会事象について何を明らかにしてきたのだろうか。例えば、「恋愛」という同じ言葉を用いても、全ての人が同じ内容、同じ期待を付与する訳ではない。「恋愛」に対する意識、すなわち「恋愛」観が多様であるとすれば、その多様性はどのようなパターンの存

在として把握できるものであり、各パターンの比率はどのようであり、各パターンの差異を生み出す原因やそれが生み出す結果には、どのようなことがあるのか。

本稿では、桃山学院大生へのアンケート調査をもとに、「恋愛」への期待という側面から、因子分析、クラスター分析という探索的手法による「恋愛」観のパターンの析出を試みる。そして、得られたクラスターと属性および結婚観との関連の検討も行って、「恋愛」への社会学的研究のための一つの資料を提示することを課題とする。

Ⅱ 研究の方法

(1) 分析への視点

① 「恋愛」へのアプローチ

「恋愛は論じるものではないと言われるわりには、「恋愛」について様々なことが語られている。書店の書架にも、「恋愛」を論じた多くの書物がある。しかし、その多くは自らの体験談や見聞に基づくエッセイ、啓蒙書、あるいはハウツー本である。「言うまでもなく、恋愛は幻想である」(岸田秀, 1982) ならば、なんと自らの幻想を語りたがる時代であろう。しかし、幻想も個人を離れて共同幻想となると、ただの幻想に過ぎないと笑ってはいられない。それは重要な社会事象となり、様々な学問の研究対象となる。

「恋愛」を対象とする研究が最も蓄積されているのは、おそらく心理学であろう。松井豊(松井豊, 1993)は、「対人魅力の研究」と「恋愛中に起こる独特の心理に関する研究」に大別しながら、心理学における「恋愛」を対象とした研究の成果を紹介している。そこには多くの興味深い知見が提示されているが、ここでは個々の知見よりも、心理学が「恋愛」を研究する理由に着目したい。松井は、その理由として「恋愛が人とくに青年に与える影響の重大性」と「恋愛という現象の特殊性」の2点を挙げている。前者はプラグマティックな理由付けであり、その限りでは本稿の視点と一致する。しか

し、心理学が考える「恋愛の特殊性」とは何であろうか。この点について松井は、「恋愛は、本人の主体性が反映しやすい関係ですから、関係の中で生じるさまざまな意識が行動と結び付きやすいという」特徴を指摘し、意識と行動の関連に興味をもつ心理学者が研究をしたがる理由とする。しかし、この特徴には、二つの曖昧な前提が含まれているように思える。それは「主体性を反映しやすい」という前提と、「関係」という前提の二つである。

「恋愛病の時代」と言われ、「恋愛」に関する言説が身の回りに溢れている今日に、「恋愛」はどれだけ「主体的」なものと言えるのだろうか。さらに、具体的関係を伴わなくとも、現代においては観念としての「恋愛」が先行して存在しているとは考えられないだろうか。誤解無きよう付言するが、心理学的「恋愛」研究を批判しているのではない。ただ、その前提そのものも問題とする必要を指摘しているのである。そして、前提そのものを疑う時、心理学とは別の角度からの研究も必要となり、そして現実中存在する。

心理学をある前提から出発する学問とするならば、その前提そのものを問題とする学問として歴史社会学がある。現在、歴史社会学は心理学とは別の観点から「恋愛」を研究対象とする有力な学問でもある。歴史社会学は「日常生活に潜む相対的に不変の構造とその長期的変動を剔出しよう」とし、それによって「われわれが日常的に疑うことなく用いている諸概念は歴史的時間の中に浴融され、想像したこともない姿に変貌」させられる（落合恵美子，1989）。そして、歴史社会学はわれわれが当たり前のこととする「恋愛」の前提を掘り起こし、それが近代以降に成立した特殊歴史的産物であることを解き明かす。

特に、家族史研究の中の「感情研究」と言われる分野では、「近代的な」社会諸関係の出現という基本的関心（Anderson, M., 1980）を共有しつつ、性的関係と結婚の内容の変化およびその結合の変化を研究対象の一つに据え、その中で「恋愛」という観念が性的関係の変化を示す近代の産物であること、そして「恋愛」は性的関係と結婚とを結び付ける特殊歴史的産物で

あることを示してきた (Shorter, E., 1975, Stone, L., 1979, Flandlin, J., 1981 など)。彼らによれば, SEXが生殖を離れて感情と結合,あるいは性的関係において感情の側面が顕在化したことと,結婚においても感情の側面が重視されるようになったこと,そしてSEXと結婚が,顕在化し重視されるようになった感情の側面すなわち「恋愛」によって結び付けられたこと(「性一愛一夫婦」三位一体観)が,まさに近代的な変化であり,近代を特徴づける関係のあり方であるとされる。

「恋愛」が近代の特殊歴史的産物であるという知見は,それを個人事象,社会から独立した心理事象とする観点以外に,社会によって変化する社会事象として位置づける必要を示す。「恋愛」は,「自殺」同様,個人的な事象であるとともに社会的な事象でもある。

しかし,「恋愛」に関する社会学的研究は少ない。最も関連の深い家族社会学の中にも,「恋愛」研究はほとんど存在しない。せいぜい配偶者選択研究に「恋愛」か「見合い」かという二分法が取り入れられたことと,異性交際の研究が若干みられる程度であり,どちらも「恋愛」という概念の中身には触れていない。「異性交際において欠くことのできない要素が性と愛であるが,これまでの家族社会学では,この問題にはあまりふれなかった。性の問題はタブーであり,愛の問題は科学の対象となりにくいという固定観念があったからである。」(望月嵩, 1987)と言われるように,社会学者こそが特殊歴史的産物を不偏のブラックボックスと思いきむ陥穽に落ち込んでいたのかも知れない。

そこで本稿では,「恋愛」を社会事象とした上で,個人の主体性という側面よりも,それが社会によっても規定されるという側面に注目する。すなわち,ここで対象とする「恋愛」とは,他者との関係の内実でも,関係によって起こる心理的变化の状態でもない。それは社会によって規定された「社会関係を意味づける一つの観念」である。

②分類の視点

次に「恋愛」の分類について考えてみよう。ふだんわれわれは、何気なく「彼奴は遊び人」だとか「彼女はお堅い」などと言った分類を行っている。それでは「恋愛」を対象としてきた研究は、「恋愛」の分類についてどのような知見を提示しているだろうか。

まず、「恋愛」研究の本家とも言える心理学からみよう。前掲の松井は、「恋愛」を分類する理論として、リーの色彩理論を紹介している。色彩理論では、「恋愛」をルダス型（遊びの愛）、プラグマ型（実利的な愛）、ストーゲイ型（友愛的な愛）、アガペ型（愛他的な愛）、エロス型（美への愛）、マニア型（狂氣的な愛）の6類型に分けて、それらを色相環になぞられえて環状に位置づけている。この理論には心理学の中でも様々な議論が展開中のようであり、専門外の筆者には無知な点も多いが、類型を分ける軸として、関係（ルダス型とアガペ型）、目的（プラグマ型とエロス型）、そして感情（ストーゲイ型とマニア型）の3軸があると思える。この理論は「恋愛」の全体像を射程に入れているとも見えるが、逆に「恋愛」を分析するレベルを曖昧にしているとも思える。

社会学に目を転じると、コミュニケーションの観点から「恋愛」を分析した山田昌弘（山田昌弘，1991）による類型設定がみられる。彼は、恋愛感情や恋人の「特殊性」を保証する条件として、相手とのコミュニケーションの位置づけに関する①排除規範（「恋人以外の人とある種のコミュニケーションをしたいと思っはいけない（してはいけない）」という規範）と、コミュニケーションの内容に関する②恋愛・恋人規範（「愛があるならある種のコミュニケーションがしたいはず（するはず）」という規範）という二つの規範を提示する。そして、この2規範の組み合わせにより、「A. 恋愛規範と排除規範の両方が強いグループ」「B. 排除規範が強く、恋愛規範が弱いグループ」「C. 恋愛規範は強いが、排除規範は弱いグループ」「D. 恋愛規範も排除規範も弱いグループ」の4類型を設定して、現代の「恋愛」の特徴を、グループDに分類される行動の増加に求める。

それでは本稿では、どのように「恋愛」を分類するか。本稿の視点は、「恋愛」を「社会関係を意味づける一つの観念」という側面に限定している。この限定は、色彩理論のように「恋愛」の全体像を分類とはなじまない。また、山田は二者間のコミュニケーション・レベルから論じて、いわば「恋愛」が「関係である」という点を重視しているが、ここではむしろ、関係に先行する観念という部分に注目したい。マスメディアによる「恋愛」言説のシャワーを誰もが浴びている現在、関係の存在以前に「恋愛」は観念として存在している。例えば「私がウブな中学生だった頃に考えていた「愛しあう」がどういうものだったか」といって、甘くて、楽しくて……（中略）……具体的ではないけどとにかく“スゴクいいものである”という、なぜだかわからないけど、そういう確信をもっていた。」（小嶋優子，1991）というように、関係以前に「恋愛」という事象に関する観念が存在する点にこそ注目するのである。そこでここでは、「恋愛」に対する期待という側面に着目して、大学生の「恋愛」観へのアプローチを試みてみたい。

③分析の方法

本稿の方法は、山田のように論理的に軸を設定し、その組み合わせで論理的な類型を抽出するという、いわば演繹法的な手法ではなく、探索的統計手法による帰納法的な類型設定である。この手法はデータに左右される側面が大きく、本稿の知見はすべて仮説の提示というレベルに留まるが、現実を捉える一つの資料としての価値は小さくないであろう。

以下、大学生への簡単なアンケート調査によって得られたデータをもとに、「恋愛」への期待という観点から「恋愛」観のパターン析出作業を行う。具体的には、因子分析によって「恋愛」への期待の構成要素を抽出し、さらにそれをクラスター分析にかけることによって、「恋愛」観のパターンの分類を行う。そして得られた各クラスターと属性、さらに結婚観との関連の分析を通して、各パターンのもつ意味、社会事象としての「恋愛」観各パターンの位置づけまで考察を拡げていきたい。

表1 分析サンプルの基本属性 (縦計%)

学年	学部	年齢	性別	クラブ等 所属	恋人有無	
1年生	65 経済 (18.7)	50 18, 19歳 (14.4)	60 男子 (17.2)	212 あり (61.1)	184 あり (53.0)	126 (36.3)
2年生	57 社会 (16.4)	226 20, 21歳 (65.1)	209 女子 (60.3)	135 なし (38.9)	163 なし (47.0)	221 (63.7)
3年生	168 経営 (48.4)	36 22歳以上 (10.4)	78 (22.5)			
4年以上	57 文 (16.4)	35 (10.1)				

(2) データの性格

調査は、1993年11月に桃山学院大学の授業（総合講座（風俗）、社会学基礎講義05、社会調査03）の受講者を対象に実施した。調査方法は、出席者に調査票を配布し、約20分間で記入して貰い、それを教室で回収するという方式をとった。分析には、回収数384のうち、無回答を含む27ケースを除外した347ケースを用いる。

分析サンプル347ケースの属性についてまとめたのが表1である。調査実施科目の都合上、学年では3年生が48.4%と最も多く、学部では社会学部生が65.1%と群を抜いて多い。その結果、年齢も20, 21歳が最も多く、性比も女子が38.9%と桃山学院大全体の比率よりも多くなっている。また、クラブ等への所属では半数以上（53.0%）が何らかのクラブ・サークルに属し、恋人有無では3分の1強の36.3%が調査時点で恋人がいると回答している。

Ⅲ 分 析

(1) 「恋愛」観の分類

① 指標の構成

本稿で「恋愛」への期待を測るために用いた質問形式は、「あなたが恋愛に期待するものは、何ですか。次のそれぞれについて、「大変期待する」「あ

表2 「恋愛への期待」各項目の単純集計 (横計%)

	大変期待する	ある程度期待する	期待しない
①幸せ	257(74.1)	82(23.6)	8(2.3)
②思ったことを何でも話せる	219(63.1)	110(31.7)	18(5.2)
③人間的成長	182(52.4)	140(40.3)	25(7.2)
④安心	208(59.9)	113(32.6)	26(7.5)
⑤遊び相手	150(42.2)	164(47.3)	33(9.5)
⑥SEX	101(29.1)	206(59.4)	40(11.5)
⑦わがままを聞いてくれる	71(20.5)	192(55.3)	84(24.2)
⑧自己満足	79(22.8)	178(51.3)	90(25.9)
⑨結婚	41(11.8)	179(51.6)	127(36.6)
⑩自慢の種	33(9.5)	155(44.7)	159(45.8)
⑪プレゼント	28(8.1)	130(37.5)	184(54.5)
⑫スリル	34(9.8)	113(32.6)	200(57.6)
⑬世間体の良さ	25(7.2)	119(34.3)	203(58.5)

る程度期待する」「期待しない」のなかから当てはまるものにマルをつけてください。」と問い、「幸せ」「人間的成長」「SEX」など13項目について回答してもらうというものである。項目は、前掲の山田昌弘による研究の項目を参考に、ゼミの学生数人とのディスカッションを通して選定した。13項目それぞれの単純集計結果を示したのが、表2である。

表2を見ると、13項目は期待の程度の比率によって、3つのグループに分かれるようである。「幸せ」「思ったことを何でも話せる」「人間的成長」「安心」の4項目で「大変期待する」が過半数を超え、特に「幸せ」は74.1%が「大変期待する」と回答しており、「恋愛」に「幸せ」を期待する意識の強いことがわかる。「遊び相手」「SEX」「わがままを聞いてくれる」「自己満足」「結婚」の5項目では、「ある程度期待する」が50%前後となり、先の4項目に比べて、「恋愛」に期待されるものではあるが、期待の強さはやや低い。残りの「自慢の種」「プレゼント」「スリル」「世間体の良さ」は、「大変期待する」の比率が10%以下であり、「期待しない」の比率が50%前後に達する。これら4項目は他の項目に比べて、「恋愛」に期待することの相対的

に少ない項目と言えよう。

②因子分析

次に、この13項目に対して因子分析を行う。山田も、「幸せ」「心の支え」「人間的成長」「思ったことを何でも話せる」「わがままを聞いてくれる」「遊び相手」「性関係」「人にひきめを感じない」「自慢の種」「結婚相手」の10項目に対する因子分析から3因子を取り出している。第一因子は、「幸せ」「心の支え」「人間的成長」「思ったことを何でも話せる」「わがままを聞いてくれる」の5項目からなり、心理的に「親密」な関係、あるいは「親密性を保証するものとしての恋愛」と解釈される。第二因子は、「遊び相手」「性関係」「人にひきめを感じない」「自慢の種」の4項目で、「恋人がいること」自体を期待するもの、あるいは「社会的価値（SEXも含む）としての恋愛」と解釈される。第三因子は、「結婚相手」一つで、「結婚の手段としての恋愛」と解釈される。

本稿では13項目それぞれに「大変期待する」=2, 「ある程度期待する」=1, 「期待しない」=0のスコアを与えて、主因子法による因子分析を行って、4因子（固有値1以上）を算出した。各因子に対する各項目の因子負荷量は表3に示す通りである。

第一因子には、「安心」「わがままを聞いてくれる」「幸せ」「思ったことを何でも話せる」「結婚」の5項目、第二因子には、「プレゼント」「世間体の良さ」「スリル」「自慢の種」の4項目、第三因子には、「SEX」「自己満足」「遊び相手」の3項目がある。また、第四因子で因子負荷量の大きい項目は、「人間的成長」の1項目だけである。

これは、山田の結果と次の3点で相違する。第一に、山田の分析では第一因子を構成していた「人間的成長」が独立している。本稿の結果をみると、「人間的成長」は「わがままを聞いてくれる」と排反関係にあり、そのため

1) 分析には全て桃山学院大学計算機センターを利用し、因子分析には SPSSX の FACTOR コマンドを、クラスター分析には同じく SPSSX の QUICK CLUSTER コマンドを使用した。

表3 「恋愛への期待」13項目の因子分析

	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子
④安心	.63285	.05676	.09319	.00686
⑦わがままを聞いてくれる	.59065	.28898	.10884	-.35664
①幸せ	.51123	-.04717	.25305	.24029
②思ったことを何でも話せる	.50427	.02858	-.07898	.04852
⑨結婚	.47155	.22000	-.00259	.12327
⑪プレゼント	.21463	.66100	.01797	.00753
⑬世間体の良さ	.06689	.61348	.25913	.10881
⑫スリル	-.06535	.51623	.32951	.05520
⑩自慢の種	.24027	.44298	.35694	-.11465
⑥SEX	-.09459	.13063	.58314	.04789
⑧自己満足	.08940	.28274	.41242	.09296
⑤遊び相手	.15679	.10108	.39311	-.20480
③人間の成長	.25274	.15651	.00040	.38753
寄与率	24.9%	13.9%	8.8%	8.1%

*主因子法（バリマックス回転・固有値1以上）

第一因子から独立している。第二に、「社会的な価値としての恋愛」が第二因子と第三因子に分裂する。このため山田の「社会的な価値としての恋愛」にはSEXも含むとされていたが、本稿では分離して扱う必要が生じる。第三に、山田の結果では独立した因子を構成していた「結婚」が、本稿では第一因子に吸収されている。「結婚相手」と「結婚」というワーディングの違いがあるが、この結果は、本稿の第一因子を親密性という観点から解釈することを留保させる。

以上の相違点により、本稿の第4因子の解釈には、山田とは異なった解釈を必要とする。ここでは、4因子を次のように解釈しておくこととしたい。まず第一因子は、親密性欲求というよりも、「恋愛」によって当事者個人自身が「幸せ」になること、あるいは「安心」することを期待するという側面が強いのではないかと解釈して、これを「内面的安寧」の因子と呼ぶ。「思

ったことを何でも話せる」「わがままを聞いてくれる」「結婚」は、この「内面的安寧」を実現するための手段として解釈できよう。第二因子と第三因子は、山田の「(SEXも含むものとしての) 社会的価値としての恋愛」が分裂したものと考えられる。そこで、第二因子を、恋愛相手以外の他者からの評価あるいは「恋愛」に付随するメリットを期待にするものと考えて、これを「外面的満足」と呼ぶ。第三因子は、恋愛相手との関係のあり方をSEXを中心に期待するものと考えて、これを「快楽」の因子と呼ぶ。第四因子は、項目が1つなので、そのまま「人間的成長」の因子と呼んでおく。

以上の因子分析によって、「恋愛」への期待の構成要素を「内面的安寧」「外面的満足」「快楽」「人間的成長」の4因子に集約した。元となった項目の単純集計結果からみると、「内面的安寧」「人間的成長」の2因子は「恋愛」への期待の多い因子であり、「快楽」も相対的に期待の多い因子である。「外面的満足」は「期待しない」が過半数を超える項目も多く、やや期待の少ない因子と言えそうである。

③ クラスタ分析

それでは、「恋愛」観のパターンは、どのように分類できるだろうか。本稿では、クラスタ分析による分類を行う。クラスタ分析とは、変数間やケース間の類似関係に基づいて、その分類を行うものであり、ここでは先の4因子のケース別因子得点をもとに、ケースをいくつかの群(クラスタ)に分類する。クラスタ分析の特徴上、いくつに分類するかは、かなり恣意的に行わざるをえないが、クラスタ数2~7それぞれを指定して検討(ケース数、因子得点平均値の比較等)した結果、6個のクラスタを構成した。

表4は、6つのクラスタの因子得点の平均値を示す。表5は、分析の出発点となった13項目について、該当クラスタと他の5つのクラスタの合計の平均値との差異をみたものである。検定の符号をつけることで、表4での傾向をさらにはっきりと読み取ることができる。以下、表4、5をもとに各クラスタの特徴をみてみよう。

表4 「恋愛への期待」因子得点のクラスター分析（クラスター別因子得点平均値）

	第一因子 (内面的安寧)	第二因子 (外面的満足)	第三因子 (快 楽)	第四因子 (人間的成長)
第一クラスター (84)	0.3243	-0.4830	0.3238	-0.4094
第二クラスター (36)	-1.2750	-0.1053	-0.7213	-0.3398
第三クラスター (34)	.06359	1.5070	0.8425	-0.0680
第四クラスター (63)	-0.8562	-0.2389	0.5581	0.3222
第五クラスター (5)	-0.7453	1.4024	-0.4133	1.1019
第六クラスター (125)	0.4376	0.0093	-0.5038	0.1850

表5 クラスター別「恋愛への期待」各項目のスコア

	第一クラ スター	第二クラ スター	第三クラ スター	第四クラ スター	第五クラ スター	第六クラ スター
④安心	1.76++	0.72--	1.88++	1.07--	1.00	1.74++
⑦わがままを聞いてくれる	1.26++	0.41--	1.76++	0.34--	0.20-	1.04
①幸せ	1.82+	0.88--	1.94++	1.71	1.60	1.83++
②思ったことを何でも話せる	1.69	1.08--	1.79+	1.12--	1.60	1.81++
⑨結婚	0.63	0.41--	1.14++	0.41--	0.80	0.99++
⑪プレゼント	0.17--	0.33-	1.47++	0.23--	1.60+	0.68++
⑬世間体	0.21--	0.30	1.38++	0.46	1.60+	0.44
⑫スリル	0.28--	0.30-	1.50++	0.73+	1.00	0.35--
⑩自慢の種	0.75	0.25--	1.52++	0.46-	0.60	0.52
⑥SEX	1.34++	0.86--	1.73++	1.65++	1.20	0.76--
⑧自己満足	1.02	0.52--	1.52++	1.19+	0.80	0.80--
⑤遊び相手	1.60++	0.97--	1.73++	1.42	0.80	1.12--
③人間的成長	1.22--	1.00--	1.79++	1.36	2.00++	1.66++

*+-1%, ++- -0.1% 有意水準（該当クラスターと他のクラスターの合計との平均値のT検定）

第1クラスター (N=84) : 「内面的安寧」「快樂」で平均よりも得点が高く、「外面的満足」「人間的成長」で得点が高い。各項目でも「安心」「わがままを聞いてもらえる」「幸せ」「SEX」「遊び相手」という項目で他のクラスターの平均よりも高く、逆に「プレゼント」「世間体」「スリル」

「人間的成長」という項目では低い。このクラスターは、「恋愛」に対して「外面的満足」や「人間的成長」についての期待が相対的に低い一方、「安心」「幸せ」などの「内面的安寧」と「SEX」「遊び相手」などの「快楽」とを分離しないでともに「恋愛」に期待する要素として重視している点に特徴がある。この意味で、このクラスターを「内面プラス快楽派」と呼ぶことにする。「内面プラス快楽派」はサンプル中24.2%であり、2番目に大きなクラスターである。

第2クラスター (N=36)：全因子で得点が低く、特に「内面的安寧」「快楽」で極端に低い。各項目でも、他のクラスターの平均よりも低い傾向が明白である。このクラスターは、「恋愛」なるものへの期待が全般的に低く、「恋愛」への意味付けが消極的なグループと考へて「恋愛消極派」と呼ぶことにする。「恋愛消極派」はサンプル中10.4%である。

第3クラスター (N=34)：「外面的満足」で極端に得点が高く、「内面的安寧」「快楽」でもかなり高い。項目でみると、因子ではほぼ平均であった「人間的成長」も含めて全項目が有意差をもって高い。このクラスターは、「恋愛消極派」とは逆に、「恋愛」に多くのことを期待する、「恋愛」への意味付けの積極的なグループと考へて「恋愛積極派」と呼べよう。「恋愛積極派」の比率は「消極派」とほぼ同じ9.8%である。

第4クラスター (N=63)：「内面的安寧」がかなり低く「快楽」が高い。「外面的満足」はやや低く「人間的成長」はやや高い。項目では、「SEX」「自己満足」「スリル」で高く、「安心」「わがままを聞いてくれる」などで低い。このクラスターは、「内面プラス快楽派」が「内面的安寧」と「快楽」双方に高い期待をもっていたのに対して、「内面的安寧」には相対的に低い期待しかおかない。「内面的安寧」と「快楽」を分離して、「快楽」のみを重視する点にこのクラスターの特徴があるとして、このクラスターを「快楽中心派」と呼ぶ。「快楽中心派」のサンプルの中の比率は18.2%である。

第5クラスター (N=5)：「外面的満足」と「人間的成長」で極端に高い

得点を示し、「内面的安寧」「快樂」でかなり低い。「内面的安寧」「快樂」を軽視して、「外面的満足」のみを通して「人間的成長」をはかるクラスターとも考えられる。そうだとすれば、「恋愛病の時代」を最も功利的に、しなやかに生きる人々とも思えるが、ケース数が極端に少ない。ここでは取りあえず「外面重視で成長派」と呼んでおくことにする。「外面重視で成長派」は、サンプル中の1.4%に過ぎない。

第6クラスター (N=125) : 「内面的安寧」で平均よりも得点が高く、「快樂」で低い傾向がみられる。各項目でみると、「安心」「幸せ」「思ったことを何でも話せる」「結婚」「プレゼント」「人間的成長」で他のクラスターの平均よりも高く、「スリル」「自慢の種」「SEX」「自己満足」「遊び相手」で低い。このクラスターは、「内面プラス快樂派」とは異なり「内面的安寧」と「快樂」とを分離し、さらに「快樂派」とは逆に「内面的安寧」を重視して「快樂」を軽視する点に特徴を求めて「内面中心派」と呼ぶ。「内面中心派」はサンプル中36.0%を占め、最も大きなクラスターである。

(2) 各クラスターのプロフィール

①属性との関連

本稿の分析で得られた6つの「恋愛」観のクラスターは、基本属性とどのような関連にあるのだろうか。ここでのサンプルは全て桃山学院大学の学生であり、社会的地位の点でかなり同質性が高い集団であるが、本稿では「学年」「学部」「性別」「クラブ等所属有無」「恋人有無」の5変数との関連をクロス表分析で検討した。その結果、関連(5%有意水準)がみられたのは、「性別」と「恋人有無」の2変数である。

表6は、「恋愛」観クラスターと「性別」とのクロス表である。X²検定の結果、0.1%水準の有意性があり、大学生がどのクラスターに属すかは性別と強い関連をもつ。特に注目されるのは「内面中心派」であり、唯一女子のほうが構成比率が高い。性別からみると、女子の67.2%がこのクラスターに

表6 性別とクラスター

	内面中心派	内面プラス 快楽派	快楽中心派	恋愛消極派	恋愛積極派	外面重視で 成長派
男子学生	41(19.3) (32.8)	61(28.8) (72.6)	59(27.8) (93.7)	27(12.7) (75.0)	22(10.4) (64.7)	2(0.9) (40.0)
女子学生	84(67.2) (62.2)	23(17.0) (27.4)	4(3.0) (6.3)	9(6.7) (25.0)	12(8.9) (35.3)	3(2.2) (60.0)
合計	125(36.0)	84(24.2)	63(18.2)	36(10.4)	34(9.8)	5(1.4)

*(上段, 横計%) (下段, 縦計%)

含まれる。男子の構成比率が顕著に高いのは「快楽中心派」「内面プラス快楽派」「恋愛消極派」の3つであり、特に「快楽中心派」では女子の比率は6.3%（実数4名）に過ぎない。また、クラスターで性比が異なることの他にも、男子は各クラスターにある程度一定の分布を持つのに対して、女子は一つのクラスター、つまり「内面中心派」にかなり集中しており、分散が小さいことも注目される。

「恋人有無」では「内面中心派」で恋人有りの比率が高く、「快楽中心派」「恋愛消極派」で恋人無しが高い傾向があった（表略）。しかし、「恋人有無」は性差にも規定されている²⁾。そこで、男女別にクロスさせたところ、各クラスターと「恋人有無」との関連は消失した（表略）。つまり、「恋人有無」とクラスターとの関連は、「性別」の疑似相関であり、直接「恋愛」観のパターンとは関連しないと考えられる。

②結婚観との関連

「恋愛」観のパターンは、結婚に関する考え方とは何らかの対応関係を持つのだろうか。ここでは結婚に関する意識として、結婚にあたっての「親の意見の尊重」「家のつりあい考慮」、そして結婚後の「夫婦同姓」という3点を取り上げる³⁾。質問形式は「親の意見の尊重」「家のつりあい考慮」「夫婦

2) 本データでは、男子の恋人ありが28.3%（60名）に対して、女子は恋人あり48.9%（66名）と、明らかに女子のほうに恋人ありの比率が高くなっている。 ↗

表7 クラスタ別結婚観

	結婚には親の 意見を尊重	結婚には家のつ りあいにも考慮	夫婦が同じ姓を 名乗るのは当然
内面中心派 (125)	-0.54	-0.35	0.20-
内面プラス快樂派 (84)	-0.63	-0.60--	0.52++
快樂中心派 (63)	-0.59	-0.35	0.30
恋愛消極派 (36)	-0.56	-0.50	0.08-
恋愛積極派 (34)	-0.62	-0.24+	0.50+
外面重視で成長派 (5)	0.00-	-0.40	0.00
合計 (347)	-0.58	-0.41	0.32

* +-5%, ++-1% 水意水準 (該当クラスターと他のクラスターの合計との平均値のT検定)

同姓」それぞれを支持する文章⁴⁾をあげて、「そう思う」「そうは思わない」「どちらでもよい」の3つの肢選択で回答してもらう形である。分析にあたっては、選択肢に「そう思う」=1, 「どちらでもよい」=0, 「そうは思わない」=-1のスコアを与え、スコアが高ければ支持の意識が強いことを示すよう尺度化して用いる。この結婚観3項目の尺度とクラスターとの関連を示したのが表7である。

まず、全サンプルの傾向をみると、「親の意見の尊重」は-0.58, 「家のつりあい考慮」は-0.41, 「夫婦同姓」は0.32と、前2項目で否定的意見が強く、「夫婦同姓」では肯定的意見が強い。現代の大学生は、結婚にあたって、親の意見や家のつりあいを重視・考慮する意識は低いながら、夫婦が同姓であることは肯定的に考える意識が強いようである。なお、表は略したが、「家の

3) 「結婚」とは、男女の性関係、そしてそこから生まれた子どもについての一定の権利義務関係を示す一つの社会制度であり、歴史的に変化する社会事象の一つである。日本においても、「共同体主義(ムラ本位)の結婚」から「家族主義(イエ本位)の結婚」へ、そして「個人主義(個人本位)の結婚」への変化が指摘されている(姫岡勤, 1976)。

4) 調査票での文章は、それぞれ「子供は結婚相手を決めるにあたって、親の意見を尊重すべきである。」「結婚に際しては、相手の人柄だけでなく、家柄や財産など家のつりあいにも考慮する必要がある。」「夫婦は同じ姓を名乗るのが当然である。」とした。

「つりあい」では女子に肯定的意見，「夫婦同姓」では男子に肯定的意見が有意差をもって高かったことを付言しておく。

クラスターとの関連をみていくと，「親の意見尊重」ではどのクラスターも差異が小さい（「外面重視で成長派」だけ有意差をもつが，ケース数が少ないため，検討の対象としない）。「家のつりあい」では，「内面プラス快樂派」が -0.60 と否定的意見が強いのに対して，「恋愛積極派」は -0.24 とやや否定的意見が弱く，この両クラスターが対極に位置している。「夫婦同姓」では，「内面プラス快樂派」「恋愛積極派」が 0.52 ， 0.50 と肯定的意見が強く，「内面中心派」「恋愛消極派」で 0.20 ， 0.08 と肯定的意見が弱いという傾向がみられる。（なお，男女別でも検討したが，各クラスターで男女によって数値には違いがあっても，傾向には同一性があったので，ここでは男女の違いは取り上げない（表略）。）

以上の結果をもとに，クラスターによる結婚観の違いについて，興味深い点をまとめておこう。第一に，「内面プラス快樂派」「恋愛積極派」が「家のつりあい」では対極にありながら，「夫婦同姓」では類似の傾向を示した点が挙げられる。やや想像力を広げると，「内面プラス快樂派」は「家」からの解放を志向しながらも，その行き着く先にカップルの一体性を強調する近代的核家族を置き，「恋愛積極派」は「家」との闘争を避けた上で，カップルの一体性を考えるという，やや保守的な観念をもっていると考えられよう。第二に，「内面中心派」「恋愛消極派」が「夫婦同姓」に関して，ともに肯定的意見が弱いことが挙げられる。夫婦が同じ姓（多くは男性の姓）を名乗ることを重視しないこの両クラスターは，新しいカップル像あるいは男女関係を模索するクラスターとも考えられる。但し，恋愛と結婚の結び付きについての意識は異なっており，「内面中心派」は「恋愛」と結婚が結び付くという考えが強く，結婚を肯定した上で新しいカップル像を模索するとすれば，「恋愛消極派」は「恋愛」と結婚が結び付くという考えも弱く，結婚そのものも否定するなかで新しい男女関係を模索する傾向をもっているとも考えら

れよう⁵⁾。

Ⅳ 討 論

本稿では、「恋愛」への期待という側面から大学生の「恋愛」観パターンを析出し、それらと属性、結婚観との関連を検討してきた。主な知見を3点に要約して示す。

1) 「恋愛」観パターン析出のため、まず「恋愛」への期待を測る13項目を因子分析にかけ、「内面的安寧」「外面的満足」「快楽」「人間的成長」の4因子を得た。この4因子をもとにクラスター分析を行って6クラスターを析出した。6クラスターを比率の大きい順に並べると「内面中心派」(36.0%)「内面プラス快楽派」(24.2%)「快楽中心派」(18.2%)「恋愛消極派」(10.4%)「恋愛積極派」(9.8%)「外面重視で成長派」(1.4%)となる。

2) クラスターと属性との関連をクロス分析で検討したところ、「性別」が大きな関連をもっていた。「内面中心派」のみ女子の比率が顕著に高く、「快楽中心派」「内面プラス快楽派」「恋愛消極派」では男子の比率が顕著に高い。また、クラスターによる男女の比率の差とともに、男女の分散の差異も注目される。

3) 結婚観について「親の意見尊重」「家のつりあい」「夫婦同姓」の3点を取り上げ、クラスターとの関連をみたところ、「内面プラス快楽派」「恋愛積極派」が「家のつりあい」では対極にありながら、「夫婦同姓」ではともに肯定的意見が強いという類似の傾向を示し、また、「内面中心派」「恋愛消極派」が「夫婦同姓」に関してともに肯定的意見が弱いという傾向がみられ

5) 「恋愛は結婚と結び付くのが普通」という質問に対して、「内面中心派」は「そう思う」という回答の比率が41%で最も高いのに対して、「恋愛消極派」は17%で最も低い。なお、この設問は「恋愛」への期待を測る項目の中に「結婚」が入っているため、分析結果がトートロジーを起こす可能性が高いことを考慮して本文中の分析から除外した。ちなみに、この設問に対して「そう思う」は29.7%であり、必ずしも恋愛と結婚を結び付けて考えない意識が多数を占めている。

た。

本稿の分析は、データも厳密なサンプリングに基づくものではなく、分析手法も探索的方法であり、ここでの「恋愛」観の6クラスターも調査データからの経験的分類である。しかし、以上の知見は、「現代の恋愛の多様性を如何に捉えるか」「恋愛の多様性は何に規定されるか」「恋愛の多様性は他の社会事象（ここでは結婚）と如何なる関連をもつか」という問題に対して、一つのヒントを与えうるものでもあろう。最後に、これらの問題に沿いながら、ここでの知見に立脚しつつ、若干の考察を加えておきたい。

第一に、「現代の恋愛の多様性を如何に捉えるか」ということは、「恋愛病の時代」と言われる現代の「恋愛」を、「科学的」に、個人の幻想を超えた共同幻想として捉える第一歩である。「恋愛」が社会事象であるならば、それは定数ではなく、変数として扱われねばならない。もっとも本稿の分析による恋愛観の分類は、サンプリングや統計手法の点で一般化を慎まねばならないものであり、山田の結果との相違にも示されるように、その妥当性・信頼性の確定にはさらなる研究の蓄積が必要とされる。

また、ここでのクラスターの解釈は、必ずしも明白な多次元空間の中に各クラスターを位置づけて、「恋愛」観の論理的な類型設定にすぐに寄与する形とはならなかった。算出された4因子のうち、「外面的満足」「人間的成長」を十分に生かしきることができなかったこと、特に「外面重視で成長派」といった少数派の位置づけが不十分であったことは否めない。この不十分さは、筆者の力不足を露見させるものであるが、同時に、現実の「恋愛」が社会事象としてもつ空間の広がり暗示するものでもあり、演繹的に「恋愛」を論じる以外に、帰納的な「恋愛」研究の一層の必要を示すものでもあると言えよう。

本稿での分類の有効性にはなお問題はあるが、しかし、パターンを析出したことではじめて他の社会事象との関連を問うことも可能となり、「恋愛の多様性は何に規定されるか」という第二の問題に進むことができる。ここで

のサンプルはかなり社会的地位の同質なものであり、「恋愛」観を規定する要因についても十分なデザインがあったとは言えない。しかし、そのなかでも「恋愛」観の「性差」がはっきりと示されたことは注目に値する。

「性別」によって「恋愛」観や「恋愛」の態度が異なることは、日常の中でもよく言われる。本稿の分析結果でも、「快楽中心派」「内面プラス快楽派」で男子の比率が高く、「内面中心派」での女性の比率が高いことから、その背後に「男らしさ」「女らしさ」と呼ばれる男性規範・女性規範の存在を想起することは容易であろう。男性が「快楽」を中心に求めて「ケダモノ君」（鴻上尚史，1990）と言われても、女性が「イケイケ」と呼ばれるのは状況が異なる。

しかし、より注目される点は、男女の分散の差異である。男子は最も比率の高いクラスターでも28.8%であり各クラスターにある程度一定の分布があるのに対して、女子は「内面中心派」に67.2%が集中し、男子に比較してかなり分散が小さい。つまり、「恋愛」観に関して男子は多様性が大きく、女子は多様性が小さい。クラスターの性差が性別規範に由来するならば、この結果は、男性規範と女性規範の内容の対比以外に、男性規範の揺らぎ、あるいは女性規範の拘束力の強さという観点からの検討を要請するものと言える。

最後に「恋愛の多様性は他の社会事象と如何なる関連をもつか」という問題についても若干の考察を加えておきたい。「恋愛」は近代の産物と言われるが、そこには諸刃の剣のような二つの顔が指摘されている。一方では、「恋愛結婚」という言葉に示されるように、結婚をゴールとし、家族という社会秩序構成要素の成立と安定に寄与するという側面と、「恋愛はむしろ、無意識の共同性を意識的な絆に置きかえることで、共同性を破壊する役割をしてきた。恋愛は共同体の敵、家族の敵。恋愛する時、人は共同性から離脱してひとりになる決意をしている。」（上野，前掲）と言われるような社会秩序の破壊者という側面である。「恋愛」は近代の結婚を形成する要素であるが、同時に結婚にとっての脅威でもある。本稿の分析では、「恋愛」観のパ

ターンと結婚観との関連を必ずしも明瞭に解きあかしたとは言えないが、一つ注目できる点として、「恋愛積極派」の保守性を指摘しておきたい。あらゆる点で「恋愛」への期待の高いこのクラスターは、「家のつりあい」を最も重視するクラスターでもあり、「夫婦同姓」にも肯定的なクラスターである。「恋愛病の時代」と言われ、「恋愛」が一般化した現代においては、かつては社会の脅威であった「恋愛」を強く夢見ることが、今や体制への同調を示すという歴史のパラドックスを描くのかもしれないのである。

「恋愛病の時代」と言われ、誰もが「恋愛」言説のシャワーを浴びている現代、それは「恋愛」を一律に語ることの終わった時代と言えよう。このような調査が出来ること自体、「恋愛」が一般化している証拠であるが、一般化はその内部に多様性を生む。現代において、現実を展開している「恋愛」は、かつて「恋愛」が一般化する過程において持っていた意義を変質させて、既成の観念では捉えきれないものになっているのかも知れない。

従来の社会学が、「恋愛」を社会関係のブラックボックスとしていたうちに、現実の「恋愛」は社会に広く深く浸透し、さらに多様な変異をみせている。本稿は、その一端を捉える小さな試みに過ぎないが、ポストモダンと言われ、家族の揺らぎが指摘されている今日、「恋愛」を社会事象として捉えた、現実分析の蓄積が必要とされているのではないだろうか。

文 献

秋月りす, 1993, 「OL進化論(6)」講談社

Anderson, M., 1980, *Approaches to the History of the Western Family 1500-1914*, The Macmillan Press Ltd (北本正章訳, 1988, 『家族の構造・機能・感情——家族史研究の新展開——』海鳴社)

Flandrin, J., 1981, *Le Sexe et L'occident*, (宮原信訳, 1987, 『性と歴史』新評論) 姫岡勤, 1976, 「婚姻の概念と類型」大橋薫・増田光吉(編)『改訂家族社会学』川島書店, 59-83ページ。

岸田秀, 1982, 「恋愛論」岸田秀『ものぐさ精神分析』中公文庫, 138-147ページ。

鴻上尚史, 1990, 「ケダモノ君の時代の恋愛術」上野千鶴子(編)『ニュー・フェミニ

- ズム・レビュー① 恋愛テクノロジー いま恋愛ってなに?』学陽書房, 70-74ページ。
- 小嶋優子, 1991, 「Introduction 恋愛したい, でもどーして?」『別冊宝島139 恋をしない女たち 愛がわからない時代の, 私たちの恋愛さがし』JICC (ジック) 出版局。
- 松井豊, 1993, 『恋ごろの科学』サイエンス社。
- 望月嵩, 1987, 「異性交際」森岡清美・望月嵩 (共著)『新しい家族社会学 (改訂版)』培風館, 18-28ページ。
- 落合恵美子, 1989, 「<近代家族>の誕生と終焉——歴史社会学の目——」落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房, 2-24ページ。
- Shorter, E., 1975, *The Making of the Modern Family* Basic Books, Inc (田中俊宏・岩橋誠一・見崎恵子・作道潤訳, 1987, 『近代家族の形成』昭和堂)
- Stone, L., 1979, *The Family, Sex, and Marriage in England, 1500-1800*, Penguin Books Ltd (北本正章訳, 1991, 『家族・性・結婚の社会史——1500-1800のイギリス——』勁草書房)
- 上野千鶴子, 1990, 「恋愛病の時代」上野千鶴子 (編)『ニュー・フェミニズム・レビュー① 恋愛テクノロジー いま恋愛ってなに?』学陽書房, 58-61ページ。
- 山田昌弘, 1991, 「ゆらぐ恋愛はどこへいくのか——恋愛コミュニケーションの現在」アクロス編集室 (編)『ポップ・コミュニケーション全書』PARCO 出版, 50-69ページ。
- 吉本隆明, 1985, 『対幻想——n個の性をめぐって』春秋社。

参 考 資 料

- 『anan』1993・1・15日号, マガジンハウス。
- 『DENiM』1992・9月長, 小学館。
- 『MANICA』1992・8月号, 大陸書房。
- 読売新聞, 1991・7・29朝刊 (人生案内)
- 読売新聞, 1991・1・22朝刊

Variation of View about Love: The Case of the Students of Momoyama Gakuin University

Eiji Kinoshita

At present, Romantic Love became an ordinary event for anyone. We are surrounded by various discourse about Love. In such a situation, What variation will a point of view about Love have?

This paper is a preliminary study of the variation of view about Love. The data depends on the investigation which implemented the students of Momoyama Gakuin University in the autumn of 1993. In the analysis, first, it tries the classification of view about Love by the analysis searching, factor analysis, and cluster analysis. And then, We examined the relation between the attribute, the view of matrimony and clusters of view about Love.

As the results of analysis, View about Love was divided into 4 factors and composed 6 clusters. Also, the clusters of view about Love differed with sex.

Finally, We considered the change of the meaning of Love in today.